日本私立看護系大学協会 会報
The Society of Private Colleges of Nursing in Japan
2001 No.5

2009年問題に向かって期待すること

日本私立看護系大学協会理事
北海道医療大学大学院看護福祉学研究科長　中島　紀恵子

1992年に205万人だった18歳人口が，2009年には推定120万人に落ち込む。この7～8年の間に1つの政令都市に相当する18歳の若者の数が消えてなくなるという話ですからまさに、わが国の少子・高齢社会における人口転換と教育転換のターニングポイントといえます。

昨今、よく誌面に登場する大学の「2009年問題」は、全国の大学定数と志願数からみて、2009年に全入時代に入る。もしも、今のような不況が持続すれば、そのスピードはより早くくるかもしれない。そのあおりを受けやすい私学は、その存続にかけてどう立ち向かえばよいのだろうかという側面からの言及です。10年後の大学は、年中が入試シーズンということになるかもしれません。これに加えて、最近は、21世紀社会の「教育改革新生プラン」に連動する教育基本法の見直しに関する議論が進んでおります。

ご承知のように1998年以降、私立看護系大学協会は、樋口康子理事長のもと、17校から役員が指名されており、各々が8つの事業計画のいずれかに属して活動して参りました。本会報の発行も、この1つの事業です。今年度は年報が発行されますから、総会に合わせて協会活動の全体がより理解されることと思われます。

さて、昨年の夏、協会は事業計画として2日間にわたるセミナーを初めて開催しました。1つは私学運営に関すること、他の1つは志願者の確保対策に関することがテーマでした。講師の綿密に用意された資料に基づいた講演は大変刺激的でしたが、その後に企画した短大・大学各々グループ間の情報交換はそれぞれの大学が精一杯の取り組みへの工夫をしており、互いが敬意をもちつつ学び合う機会になりました。時間不足ではありましたが参加者の方々からとても有意義な企画だったと言って頂けました。

講師の講演で最も刺激的な言葉が「勝ち組・負け組」の2極化が始まっている。看護系大学は，全体としては増加しているものの志願者分散化傾向にあり、個々の大学では減少が目立つところもあり、少しづつ易化しそうな状況がみてとれるというものです。また、印象的でありながら、その方策に対する提案で雲をつかむような･･･と思ったことの1つが、「地域貢献」「地域に大事に思われ、いざという時には地域の人が喜んで寄付金を出してくれるような学校づくり」といった提言でした。“社会”ではなく、その土地という意味を込めて使われた「地域」に貢献できて、それがいつか“勝ち組”に結びつくような貢献って何だろうかと。

こんなことかもしれない、という1つのヒントは、今年『「高大連携」広がり期待』と題する1月2日の日経新聞の記事です。簡単に紹介しますと、都立国分寺高校は、大学進学をめざす高校生が，大学に入る前に、高校在学のまま大学の授業を半年または1年聴講する。それが，高校の正規単位認定の対象にもなる方式を来年度より実行するというものです。こうした高大連携にあたって高校側は、自転車で放課後通学することの可能な10大学に当ったが、私立大学のフットワークがよく、4つの私学と協定書調印式をすでに終えたといいます。

その意義を学長は「大学は地域貢献も重要で，高大連携は大学のもつ教育研究のパワーを直接活用し

ていただく良い手段」「高校生に機会を開くというだけでなく、大学も高校生を迎え入れることで学ぶことが多い」を挙げています。

本協会会員校である大学も、すでに科目等履修生や聴講生の制度や社会人入学などの受け入れ実績を持っているところや、１日看護実習などのプログラムを用意しているところも少なくありませんから、高大連携について何か考えられることがあるかもしれません。また、推薦入試やＡＯ入試後の入学までの大学側の対応についても高校側からいろいろな注文が出されているところですが、ここにも何かよいアイデアがあるかもしれません。

私学は、本来的に起業家的な志向性をもっているといわれます。そしてフットワークのよい実行も私学の特徴です。こうした特徴それ自体が教育の場と同じように激動するこれからの看護現場に送り込むことになる学生の生涯教育のプラン作りに連動して、各大学を活性化させるように思います。

大学教育の今昔

日本私立看護系大学協会理事
川崎医療福祉大学医療福祉学部前保健看護学科長　　齋藤　泰一

昭和一桁生まれなので化石人とか何とか若者から云われる世代の私が、古き良き時代の大学教育と現在の教育との違いについて私見を述べてみたい。

学問か職業教育か

文学部などは教職は別として職業教育はなじまないだろう。これは学部によって異なる問題である。医学部でも私が受けた（旧制度の最後の年）教育は大学は学の蘊奥を極めるところだと云うことであった。旧制高校や医学部予科では本当に自由な教育が行われていた。一年間俳句の話しばかりされた文学の先生、いろんな動物の下垂体の発生学だけを話された生物学の先生、関係代名詞だけを講義された英語の先生、牧師のくせにビーグル号航海記を講読された英語の先生、... etc. このような講義は直ぐの役には立たないけれども、鮮烈な印象を与えたし、ものの考え方に大きく影響した。それに比べて教科書を万遍なく教えられた講義はあまり頭に残らなかった。自分の研究テーマだけで一年間講義できる先生がいまどれくらいおられるだろうか？　狭くても深くやれば裾野は必ず広がるものである。浅く広くやれば浅薄になってしまうのではないか。

現在では講義のシラバスをＧＩＯ（一般教育目標）やＳＢＯ（個別行動目標）をきめて提出しなければならない。こうなると実学に属する学部では職業教育が目標になってしまうだろう。全人格的な人間の養成というだけの目標では、専門教育の分野では許してもらえないだろう。４年生大学にした目的は何だったのか。

更に自己点検・評価ということが盛んに導入され、自己点検のまとめの分厚い冊子がほとんど毎週のように全国の大学から送られてくるが、自分の大学のでも最後まで目を通している人はどれくらいいるだろうか。何も分からない学生に教員の評価をさせるために大学本来の目標を見失ってしまう虞もある。受験生の数を減らさないためにということで学生の意見を教授方法にまで取り込むのは、私にはどこかすっきりしない感じがする。

マニュアル人間の養成

近年医療事故が目立ってきている。無知、不注意、慣れによるものと、人員不足、予防対策やチェック機構の欠如など組織上の欠陥によるものがある。事故を起こさないようにマニュアルは作ってあるのだが、焼津の日航機のニアミスのように、そんなものは何の役にも立たない場合がある。思い込みがあると自己チェック機構が働かなくなってしまう。小学校での試験から看護婦・士の国家試験まで多肢選択

問題に慣らされた人間には、答えが書いてあるので自分で調べ、自分で考え出すという習慣が無くなってしまっている。それでマニュアルに無い、答えの無い事態が生じたら適応できなくなってしまう。

最近ＥＢＮ(Evidence Based Nursing)やＥＢＭ(EB Medicine)というのが流行っている。勿論根拠がなければ正しいとは云えないが、その根拠の疑わしいものが使われていることもある。例えば統計的確率である。薬の有害作用のインフォームド・コンセントのときに、「まれに」出るというのは発生の頻度が0.1％未満、「ときに」は0.1％～5％未満で、何も書いていないのは5％以上か何も分からない場合ということになっている。このデータから、患者さんに「その有害作用が私に出るか」と尋ねられたらどう答えられるか？　こんなあやふやな情報を基に患者さんは自分でその薬をのむかやめるか自己決定しなければならない。この自己決定も流行の一つである。確率の意味が理解できたらこんな話しはなくなるのである。事象が生起するまでは絶対に判らないが、生起した後は確実に判るのが確率である。宝くじのあたり番号を考えればよく分かる。抽選の日迄はどんなことをしても当たりくじは判らないが、抽選が済むと絶対に判るのである。但し、有害反応は以前にショックになったとか、抗体や遺伝子検査で何か出た場合は確実に予言することができる。情報の威力である。

クリティカルパスというのも最近よく聞くが、これもマニュアルどおりに行くとは限らない。外国のものを輸入するのではなく、本質を見極める能力を付ける教育も必要である。

にせ医者は親切

看護学の教育もかなり変化し、在宅看護などが重要視されるようになったのは良いことだけれども、実習期間が2週間ずつでよいということになったのはどうなのだろうか。こんな短時間では十分な教育は無理であろう。医学部も6年間の教育では不十分なので、インターンや研修生の制度がある。学校を出ただけでは役に立たない。看護もそうなってきたのだろうか。

施設や保育園などの実習で、他人とのふれ合いを重視する教育も行われている。コミュニケーションや相手の受け入れなどはは重要だが、知識と技術は両輪でなければならない。偽医者のことが新聞に載ると「あんな親切な先生が？」というコメントがよく出ている。偽医者は患者とはとても上手につきあっている。知識と技術がないから患者の心に取り入るように心懸けるのである。専門職としての知識と技術も大切にしたいものである。

オスラーの医学はサイエンスとアートであるというのは有名である。エーリッヒ・フロムは The Art of Loving という本に、アートを学ぶ過程には一つは理論に習熟することと、もう一つは実践の習熟であると言っている。治療のアートは理論的知識の結果と、実践の結果とが一致するまで多くの訓練を経なければならないとも言っている。心理学的効果も必要な技術だが、本質がしっかりした上でなければ偽医者と同類項になってしまう。

アートの解釈はヒポクラテス以来難しい問題を抱えている。私の考え方は下記の文献を参照されたい。

（日本医事新報　No.3114,pp49-51,1983,12,31.
同　　上　　No.3593,pp61-62,1993,3,6.
日本オスラー協会ニュース　No.3, pp2-3, 1984,7.）

看護の中で考えること

私は昔歯学部が新設された所に11年間勤めたことがある。その時に聞いた言葉と看護の世界で聞く言葉と同じなのに驚いた。歯学は医学とは別な autonomy 的存在だと言うことである。歯学部出身者が教育しなくてはならないといって、医学と協力しようとする考えは歓迎されなかった。私がインターンをさせていただいた病院では、ナースはすばらしい人たちで、医師と対等の立場で患者さんのために話し合いをされていたのには感激した。そのような姿が少し減ってしまったのではないかと感じられるのは残念なことである。

看護で使っている言葉で気になることもある。与薬ということばである。投薬が悪いということらしいが、薬物投与が略されて投薬となったのである。与というのは授けるということで、犬に餌を与える、豚に真珠を与える、殿様が家来に褒美を与えるというように、目上の者が目下の者に下げ与えることである。友達からこの鉛筆を君に与えるよと言われたらどんな感じがするだろうか？　あげるでなければ失礼になると思うがどうだろうか。投与というのは投げ与えることではない。多少という言葉に多いという意味はないのを考えればよい。

大変失礼なことも言ったかもしれませんが、看護の世界に入って5年間、気にしていることを書きました。

平成12年度理事会報告

第１回理事会報告

開催日時：平成12年８月２日（水）13:30～15:50
場　所：日本赤十字看護大学
出席者：樋口康子、橋本葉子、常葉惠子、近藤潤子、狩野庄吾、藪田敬次郎、梶山祥子、村地俊二、堺　俊明、岡崎寿美子、斉藤泰一、七田惠子、厚東篤生、中島澄夫　（敬称略、順不同）

＜報告事項＞

1. 平成12年度総会アンケート結果について
総会ならびに懇親会のアンケート結果が報告され、来年度も同会場を予定していることが説明された。
2.「財政基盤に関する調査研究」講演会、「教育・研究に関する調査研究」講演会・ワークショップの開催について
橋本副会長より、講師紹介・プログラムについての説明があり、加盟校教職員の参加が要請された。
3. 平成12年度事業活動経過報告
各事業活動担当理事より活動経過報告がなされた。
4. 事務局報告
1）会費納入状況ならびに事業活動費の各担当者への振込みについて報告された。
2）年報・会報・名簿・セミナー案内を各加盟校への送付した旨報告された。
3）日本赤十字広島看護大学開学式に祝電を送った旨報告された。

＜審議事項＞

1. 2000年（第89回）看護婦（士）国家試験不適切問題とその根拠について
案文が審議され、承認された。
2. 役員選出に関わる事項について
審議の結果、現行の問題点を整理し、継続して審議することとなった。

第２回理事会報告

開催日時：平成12年11月18日（土）13:30～16:30
場　所：日本赤十字看護大学
出席者：樋口康子、橋本葉子、常葉惠子、近藤潤子、狩野庄吾、藪田敬次郎、中島紀恵子、斉藤泰一、厚東篤生、中島澄夫　（敬称略、順不同）
委任状：６名

審議に先立ち、日本赤十字看護大学事務局の新任職員葛西芳明（総務課長）が紹介された。

＜報告事項＞

1. 平成12年度事業活動経過報告
各事業活動担当理事より活動経過報告がなされた。
2. 事務局報告
1）平成12年９月30日に開催された東邦大学医療短期大学開学15周年記念祝賀会、五島瑳智子名誉学長退任記念の会に生花と祝電を送った旨報告された。
2）会費納入については、全加盟校から納入された旨報告された。
3）会報第４号を加盟校ならびに関係機関へ送付した旨報告された。

＜審議事項＞

1. 役員選出に関わる事項について
審議の結果、事務局が改正案を作成し、再度理事会で検討することとなった。
2. 日本私立看護系大学協会セミナーについて
常葉理事より、第３回日本私立看護系大学協会セミナーの担当校について、加盟の歴史が長い３校（藤田保健衛生大学、北里大学、天使大学）に開催を依頼する旨報告された。

（文責　赤地美映子）

第2回　日本私立看護系大学協会セミナーの報告

「看護の価値の創造」

担当校：久留米大学医学部看護学科
第2回 日本私立看護系大学協会セミナー
実行委員長　　入部　久子

本協会の第2回セミナーを久留米大学医学部看護学科が担当した。メインテーマを「看護の価値の創造」とし、現代の社会および医療の変化に対応できる看護教育・看護実践のあり方に焦点を当てホットな講演2題とシンポジウム2題を企画し、平成12年11月10日（金）・11日（土）の両日に開催した。開会に当たって担当校の河合千恵子第2回セミナー会長の挨拶、引き続き本協会副会長の常葉恵子聖路加看護大学学長、日野原重明本協会名誉会長のご挨拶があった。参加者の状況は1日目168名、2日目173名、計341名であった。

セミナー会場入口

講演1.「看護教育と看護実践の変革」

大分県立看護科学大学学長　草間朋子氏

看護大学の増設時代を迎えて、看護大学に籍をおく教職員・学生が看護職の育成における大学教育の必要性とその成果を社会に向けて示していかなければならない。そのためには私たち関係者は看護系大学を作ること、すなわち看護教育の入り口および在学中の教育に使ってきたエネルギーを、今後は看護教育の出口以降の検討のために多く費やし、社会全体に向けての働きかけを積極的に行っていかなければならない時期である。

看護教育・看護実践の変革のためには看護職の教育の場、実践の場、特に看護教育の出口以降を総合的に概観した上で、検討していかなければならないとして、1. 看護の活動分野の拡大に対する意識変革、2. 科学としての看護学の確立、3. 看護職に求められる資質（チーム医療を担う看護職）、4. 看護の各活動領域における管理者の育成と政策決定の場への看護職の参加の必要性、21世紀に向けての看護界の変革の方向について話された。

講演2.「看護とジェンダー」

久留米大学文学部教授　狩野啓子氏

ジェンダーの概念の普及の経緯を踏まえて、ジェンダーの視点に立って看護の問題を考察する。職業としての看護の前提として、まず女性の役割としての看護があった。具体的には明治時代の女子教育書「女子家庭文庫」に主婦の仕事として挙げられている「衛生」の項目の中に、「病人の看護」が含まれている。このように「看護」の仕事は主婦的仕事と見なされてきた。また、ジェンダー役割区分と序列の意識も、もちろん職業としての看護に密接に結びついている。男女平等の進展によって、「看護士」「保健士」という呼称も生まれた。しかし社会構造や人々意識に根強く残るジェンダーバイアスはすぐに消滅するわけではないので、変化そのものには混乱や葛藤も起こっている。「助産士」導入に対しても、根強い反対意見と拒絶反応がある。女性の羞恥心や自尊心の観点から反対することが多く、歴史的な時間を生きている私たちの感情としては、非常に自然である。

しかし、私はいずれは男性の「助産士」も登場し、数が増えていくことを願っている。それは、人間の生死に関わる重要な側面に立ち会う機会を男性か女性の一方に限定してしまうことは、その問題について知識や感情を共有する可能性を狭めてしまうと思うからである。また看護や助産の仕事を専門職として捉えたとき、女性か男性かを問題にして一方を除外することは、あまり建設的なことだとは思わないと話される。

シンポジウム１.「看護教育と看護の統合」

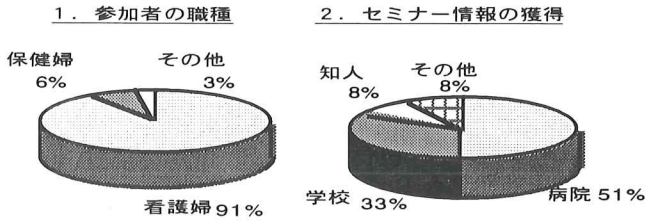
４人のシンポジストの方が、１）教員としての成長－人間への理解の大切さ、２）意味のある臨床実習を考える－経験型実習教育を中心に、３）大学と実践の場における協働の試み、４）看護実践と研究について発表された。発表に引き続き会場を交えての活発な議論がなされた。中でも「理論と実践」の統合の難しさについては、分かれてしまわないように車軸となるものが必要であるという見解に達し、モデルや経験といったものがその一役を担うと再認識された。また、人の成長を「理論と実践」或いは「看護教育と看護実践」の統合の上に考える際には、場の違いを越えて、いかにその人の個をよく知り、力を信じてがんばりに手を差し伸べるかということが重要かということになる。それは、一人一人の面接を通して看護者の個をよく引き出そうとする現任教育の取り組みにも通じることであり、看護大学生の育みにおいても同様である。一方では、看護卒業教育研修制度の提言を昨年のセミナーに引き続きしていくとともに、もう一方で看護教育～看護実践の場での育みに「新たな個の創造」を目指すことが、看護者を人として成長させ「看護教育と看護実践」の真の統合点であると示唆されるに至った。

シンポジウム２.「在宅ケアはどうなるか」

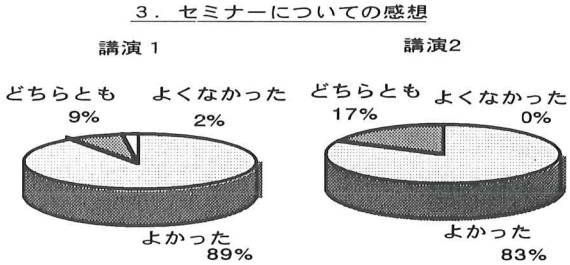
「在宅ケア」については、「病気や障害があっても可能な限り在宅で過ごすために提供されるべきケア」とするなら、そのケアは、医学的治療に加え、特に看護とリハビリテーションが重要となり、そして日常生活を支える福祉的機能も欠かせず、それらの適切な連携が必要となる。特に看護（職）は在宅を支える要となることが求められる。現在、小子・高齢社会に対応するために、平成12年４月の介護保険の実施は、これまでの入院医療や施設福祉に、そして供給サイドにウエイトのあるわが国の医療・福祉に対して、個人の自立尊重と在宅医療・在宅福祉を目指すもので、画期的な意義をもっている。このような考えにもとづいて今回は、在宅に関わる看護や他職種の貴重な実践や当事者・家族の経験が発表された。各シンポジストの諸提言が示唆することがらは深く大きく、在宅看護・在宅ケアの現状と課題の一端が明らかにできた。そして、看護職の重要性を再確認する機会となった。

セミナー会場内

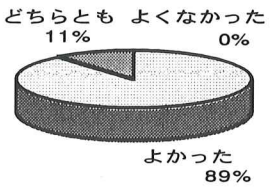
アンケート結果　回収数 64名



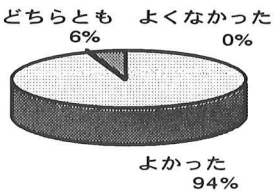
※看護婦中、保健婦１名、助産婦１名、社会福祉士１名は兼任



シンポジウム1

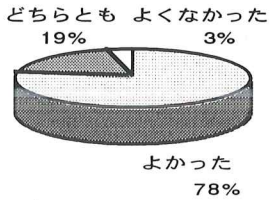


シンポジウム2

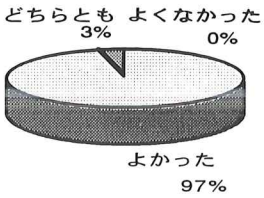


4．運営について

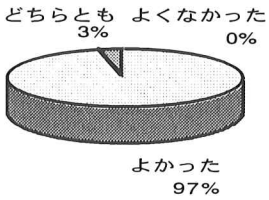
進行



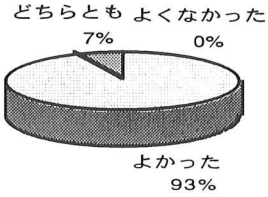
受付



音響



視聴覚



5．企画について

n=64　　人（%）

	適当	不適当	無回答
開催日数	59（92.2）	1（1.6）	4（6.2）
開催曜日	52（81.3）	7（10.9）	5（7.8）
開催時期	52（81.3）	4（6.3）	8（12.4）
会場	59（92.2）	1（1.6）	4（6.2）

n=64　　人（%）

	安い	適当	高い	無回答
会費	2 (3.1)	53 (82.8)	6 (9.4)	3 (4.7)

投稿規定

協会会員の皆様からの投稿をお待ちしております。
論壇的なもの：テーマは看護教育を初めとして会員相互に役立つ幾分硬めの論調でお願いします。字数2000字程度
声・手紙・寸評・感想・意見・エッセイなど：肩の凝らない和やかな紙面にしたいと思います。字数400～600字程度
その他　短歌、俳句、写真、スケッチなども歓迎いたします。

締切日は設けておりませんが、会報は年2回5月と11月に発行予定です。
なお、原稿の採否については編集委員会で決めさせていただきます。

原稿送付先

〒228-0829　神奈川県相模原市北里2－1－1
北里大学　看護学部　岡崎　寿美子　宛

第２回　日本私立看護系大学協会セミナーに参加して

北里大学看護学部地域看護系　講師　福田英子

平成12年11月10日・11日、福岡県久留米大学で行われたセミナーに参加しました。今年は全体テーマを「看護の価値の創造」と題して、10日は「看護教育と看護実践の変革・統合」に関する講演とシンポジウムが行われました。教育に携わって４年近くが経ちますが、未だにこれでいいのだろうかという疑問を抱きつつ学生指導に当たっています。講演とシンポジウムから教育と実践を結びつける必要性と、その方法論を知ることができました。特に安酸史子先生から、実習において教員が見守り共に歩む姿勢を持つことの理論的背景を伺い、まさに自分の教育の裏付けを得たような思いでした。11日には、「看護とジェンダー」をテーマに、文学部教授狩野啓子先生のご講演がありました。自らの受療体験をもとに外部からみた医療・看護界や、看護職の業の起源を日本の性別役割分担の歴史から紐解かれ、看護界の閉鎖性やジェンダーに深くかかわる職業であることを認識しました。また、助産士が英国ではすでに活躍していることを初めて知り、日本の資格要件が性別に縛られている感を持ちました。次にシンポジウム「在宅ケアはどうなるか」では、外来看護婦、リハビリ病院医師、家族、在宅ナースの立場から提言がありました。介護保険制度が本格的に始動した年で会場の関心も高く、質疑応答で介護保険の課題が中心となったのも、やむを得ないことだったと思われます。

セミナーから、教育・実践の統合と社会情勢に合わせた看護の役割・機能の明確化が課題であると知りました。この課題を達成するためには、看護のあり方について看護界の共通理解を深め、教育・実践とも目指す方向を検討する必要があると思われました。例えば、教育機関では、卒業時の学生像は求められる看護職の機能に左右されますし、実践の場では、他職種や対象者（患者・家族）からの期待に応えるために、看護の機能を明確に伝える必要があります。シンポジストのお１人からも、今こそ看護の目指す方向を検討すべきであるとの意見が出されていました。これは21世紀、看護の主舞台となる在宅ケアで、他職種と適切に役割分担し専門性を発揮するために重要なことと考えます。このように、教育・実践の基盤となる看護のあり方、変化する社会に合った看護職の機能・専門性について、看護界が一致して提示していくことが求められているのではないかと思われます。さらに、他専門職や一般社会の理解が得られるよう、それを上手にアピールすることも必要だと思いました。

以上のように、看護のあり方の検討を通じて、看護の価値を医療界のみならず一般社会において創造していく必要性を強く感じた２日間でした。

シンポジウム１「看護教育と看護実践の統合」

シンポジウム２「在宅ケアはどうなるか」

お知らせ

総会のお知らせ

開催日時：平成13年7月6日（金）11:00～16:00
開催場所：ウェスティンホテル東京
〒153-8580　東京都目黒区三田1－4－1
（最寄り駅：営団地下鉄日比谷線・JR恵比寿）

＜議　事＞

1．平成12年度事業活動報告
2．平成12年度決算報告
3．平成12年度会計監査報告
4．平成13年度事業活動計画
5．平成13年度予算案
6．役員選出に関わる事項について
7．その他

※総会終了後、懇親会を予定しております。
総会の詳細については、追って開催案内をお送り致しますのでご確認ください。

第3回日本私立看護系大学協会セミナー開催のお知らせ

会報第4号でお知らせ致しました本協議会主催の第3回セミナーを開催する年となりました。当番校である東海大学健康科学部では、教職員の協力により、日程や運営方法が具体化してきました。セミナーでは、「看護学の新たな発展」を目指して、看護（学）の進むべき方向を、参加者のみなさんと共に考えていきたいと思います。

テーマ：「新世紀に向けた看護」
日　程：平成13年11月17日（土），～18日（日）
会　場：東海大学短期大学部　高輪校舎
〒108-0074　東京都港区高輪2－3－23
（最寄り駅：営団地下鉄泉岳寺・JR品川）
参加費：両日とも参加の場合 8,000円（懇親会費含む）
1日目のみ 5,000円（懇親会費含む）
2日目のみ 3,000円

プログラム

1日目　11月17日(土)

9:30　受付開始

10:00　開会

10:30　基調講演「21世紀を健康に生きる：歩行を科学する」
講師（田中誠一・東海大学体育学部体育学科教授）
司会（河野啓子・東海大学健康科学部看護学科）

11:30　懇親会

13:30　教育講演「看護教育を問い直す：実践における知と ことばとしての知」
講師（山口栄一・玉川大学文学部教育学科教授）
司会（藤村龍子・東海大学健康科学部看護学科）

14:30　休憩

14:45　交流セッション「看護教育の今日的課題への対処と教育方法の探求」
A．少子社会における学校運営
B．教育・研究活動の推進のあり方
C．大学の自己評価・自己点検のあり方
D．自助グループから学ぶ新たな教育方法（精神看護学）
E．母性・小児看護学教育のあり方
F．在宅におけるケースマネージメントのあり方
G．演習主体の専門基礎科目の教授方法

17:30　終了

2日目　11月18日(日)

9:00　開場

9:30　シンポジウム「21世紀の看護教育への提言－更なる飛躍を目指して」
司会（村中陽子，横山寛子・東海大学健康科学部看護学科）
シンポジスト1．遺伝学の看護教育カリキュラムへの導入の必要性（溝口満子）
2．看護情報学のシステマティックな教育の意義（山内一史）
3．看護職による専門基礎科目教育への期待（菱沼典子）
4．エキスパート・ナースの育成と活用（野地金子）

12:30　次回担当校挨拶

閉会

（文責：村中陽子）

卒業生は今！

今号より、日本私立看護系大学協会に加盟されている学校の卒業生を、順次ご紹介いたします。
今号は日本赤十字秋田短期大学をご卒業された方のご紹介です。

秋田赤十字病院

看護婦　和田真澄

私は平成11年に日本赤十字秋田短期大学を卒業し、現在、秋田赤十字病院に勤務しています。私の勤務している病棟は、主に内科（血液、呼吸器、腎など）、婦人科、泌尿器科の患者が入院している混合病棟です。

看護短大を卒業し、初めて臨床の現場に出たとき、技術面も未熟で、また、学生の時と違い、ひとつ、ひとつの事に対し責任があり、初めは病棟で働くことが不安で病棟内をうろうろするばかりでした。その上、患者となかなかうまくコミュニケーションをとることができず、悩んだり、落ち込んだりする事も多くありました。しかし、病棟のスタッフやプリセプター看護婦が指導、また、相談にのって下さったりなど、あたたかく見守ってくれ、もう少しで3年目の扉を開こうとしています。

卒後1年目は、一日でも早く病棟の業務に慣れようと、夢中で、必死にかけぬけてきた年だったような気がします。

2年目は少し病棟の業務に慣れてきたせいか、自分の看護は本当にこれでよかったのか、今、患者が一番必要としていること、望んでいることはなんなのかなど、1年目とはまた違う視点で物事を見ることができてきたように思います。

しかし日々の激務に流され、患者の訴えに十分、耳を傾けることができずに、後になって、もう少しこうすると、この患者さんにとってよかったのではと、後悔することも多くあります。

新卒だった頃、病棟のスタッフに、「いくら患者の疾患や状態を把握していても、患者の必要としていることや、望んでいることに応えられなければ、本当の看護とはいえない」と指導されたり、学生の頃、日々の病院実習で、看護とは技術面も大切だが、心理的な面も重要だということを学びましたが、今、改めてそれを実感しています。

この2年間は、本当に、あっという間の2年間だったような気がします。3年目は患者の訴えを十分に傾聴し、必要なこと、望んでいることをしっかりと把握し、それに応える看護をしていくことができるように、努めていきたいと思います。

‥ 春の花々 ‥

＊ まんさくやいま学生を世に放つ

大学の近くにまんさくの花をみつけた。
まんさくは早春に黄色の線形の四弁花を開く。他の花々に先がけて咲くので、「まず咲く」からこの名がついたという。
校庭には学生達の声が響く。卒業が近づくと学生が一層いとおしい。「これからが正念場ですよ」と一人一人の背中をポンと叩きたくなる。

＊ 蝋梅（ろうばい）や野良着（のらぎ）が風に翻（ひるがえ）る

蝋梅も春に先がけて咲き出す。うつむきに咲く小さな半透明な花だが香りがよい。農家の庭先に野良着が干してある。風に翻るとだけ言って蝋梅の香りを言うのを控えた。

＊ 榛（はん）の木の林を抜けて梅の花

もしかしたら榛の花が咲いているかも知れないと、まむし谷という湿地帯に踏み込んだ。しかし榛の木の花はついに見つからなかった。がっかりして林を出た途端、眼前に白梅、俳人の喜びここに極まれり。

＊ 諸葛菜（しょかつさい）多摩の横山ここに果つ

春は木の花だけでなく、足元の花々も目を楽しませ、喜びを与えてくれる。諸葛菜はアブラナ科の１年草、通常は花大根と呼ばれ、春から初夏に青紫色の十文字の花を開く。東京西部、神奈川寄り一帯に連なる多摩丘陵が仲間との主な吟行地で定点観測と称してしばしば訪れる。

＊ 蒲公英（たんぽぽ）のわた飛んでいてスイスかな

レマン湖畔の公園に佇んでいると蒲公英のワタゲが一斉に飛び、小鳥の囀りも聞こえた。それだけのことだが、あらためて自然は世界中普遍だと確認したのだった。

＊ ヴェネチアングラスにアネモネ挿すことも

下戸の私は旅先で求めたグラスに時にはその辺りの小花を挿してみる、ささやかな贅沢。

＊ 花吹雪自転車を漕（こ）ぐひたに漕ぐ

家から駅まで１Ｋｍ足らずだが30年来、自転車を愛用している。今朝は花吹雪を浴びて「おおっ」と声をあげたくなるようだ。急がなくてもいいのにぐいぐいスピードをあげる、目指す駅はその名も桜上水。

日赤武蔵野短期大学専攻科地域看護学専攻
中川　禮子（俳人協会会員）

編集後記

日本の学園風景をみると、３月から４月上旬迄は時の刻みが慌ただしく過ぎて行きます。卒業式と入学式の学事は何れにしても新たな人生の扉を開き、一歩進む心の準備をするとき。特に、私立看護系大学・短期大学で学び・学んだ学生は、源泉となっている建学の精神や気風を自覚する瞬間でもありましょう。しかし、この頃では私立も国公立も気風は変わりませんという声を聴きます。特に、看護系の学校では専門職志向について共通の基盤となる思想や知識・技術・倫理的態度などを学習するので何等変わらないという感覚になるのでしょう。

一方で、私学の教育機関は独自性をカリキュラムの中に具現化することへの努力を一層求められる事でしょう。小子高齢化社会の中で私立看護系大学に期待される事はこれから質的にも変化してくると思います。新設校が開学される時、歴史を継承している教育機関はモデルとなり、新設校はまた創造への挑戦を見せてくれます。会報に掲載される新設校紹介記事が私学の学際的交流や連携と共同の輪を広げていくことを期待しています。

日本私立看護系大学協会が開催するセミナーも社会への発信源として大きな力となることができます。本会報掲載の第２回セミナー報告や第３回セミナー開催のアナウンスが周辺の人々へ伝達していただけたら幸いと思います。

21世紀始まりの年、“春の花々”の俳句を楽しみながら、新しい学生を迎えた美しい季節に北から南へこの会報が届くことを嬉しく思います。

（藤村龍子　記）

日本私立看護系大学協会会報　第５号
発行者：日本私立看護系大学協会
〒151-0012　東京都渋谷区広尾４丁目1番地３号
日本赤十字看護大学内
Tel　03-5464-3086
Fax　03-3409-0589
E-mail　jpncs@ade.dti.ne.jp
編集責任者　岡崎寿美子　狩野庄吾
印刷所：北里サービス代行（株）
〒228-8555　相模原市北里１丁目15番地１号
Tel　042-778-9288
Fax　042-777-6380